

特別支援教育実践マニュアル

保育園・幼稚園・小学校・中学校版

< 4 >

～「保護者との協力関係づくり」特集号～

特別支援教育実践マニュアル No.4 をお届けします。

今回特集する「保護者との協力関係づくり」は、特別支援教育を実践する上で欠くことのできない基盤です。

特別支援教育は、個々の子どもの実態に即して教育目標を立て、それを達成するための具体的な手立てを考案し、実践していくものです。そして、この一連の過程に柔軟性と継続性を与えるものが、「保護者との協力関係」なのです。

本マニュアルでは、「保護者との協力関係づくり」で効力を発揮するであろう「担任からのメッセージ」を4つ提案し、解説します。（なお、ここに示すメッセージはどれも、特別支援教育に限局されることなく、クラスの子どもたちが示す問題行動やトラブルに対しても最善の策を採ることを可能にするものです。）

「発達障がい」という視点からの「子ども理解」

人は誰でも、置かれた状況に対し、自分なりのやり方で対処しようとし、ます。発達障がい（遅れ・偏り）のある子ども然りで、その子なりの対処を試みます。しかしその対処は往々にして不適切なものになりがちで、それが「問題行動」と呼ばれることとなります。

特別支援教育では、その子が適切な行動をとれるよう支援します。そのための重要なツールが「個別の指導計画」です。それは、保護者の同意を得て担任が中心となって作成するものです。保護者との協力関係づくりのツールとしてもご活用ください。

浦安市教育委員会
教育研究センター

担任から保護者に伝えたい 4つのメッセージ

【メッセージ 1】 「問題行動」は「対応策」とともに伝える

「気がかりな行動（問題行動・発達の心配）」は、保護者にしっかり伝えましょう。そのとき、「手立て（対応策）」をセットにして伝えることが重要です。「お子さんは、××をしてしまうことが多いけれど、こんなふう（具体的）にして支援をしていこうと考えています。それで暫くやってみて、うまくいかなければまた別のやり方を考えますから」と、園・学校としての積極的な姿勢を示しましょう。

わが子の現実を直視できない親

保護者が子どもとしっかり向き合っていれば協力関係は作りやすいのですが、多くの保護者はわが子

の行動や発達が気になっても、なかなか正面から向き合えないままです。

「いつかは良くなるのではないか」

「自分の小さいときと同じだから心配はいらない」

「昔からこういう子はいたがそれなりに育てて自立している」等々、気にはなっても、それを打ち消す材料を探して、自分を安心させようとしていることがあります。

こうして問題を先送りしようとする保護者に対しては、園・学校も「気がかりな行動（問題行動・発達の心配）」を連絡しないままになりがちです。しかし、実はそれが後の「協力関係づくり」を難しいものにします。後々、何か大きな問題が起こるなどして急に保護者の理解を求めようとしても、保護者は防衛的になるだけで、事実を否認したり、学校を非難したりして、ますます子どもと向き合うことを回避するでしょう。

前向きな園・学校の姿

子どもの「気がかりな行動」を保護者に伝える際に示す「手立て」ですが、たとえそれが期待したほどの効力を発揮しなかったとしても、

そして何度も変更しなければならなくなったとしても、大丈夫です。「こうすればこうなるだろう」という仮説（手立て）を変更することを恐れてはいけません。仮説は変更するためにある、といっても過言ではないのです。

覚えておきたいのは、そういうことで保護者からの信頼を失うことはない、ということです。むしろ逆です。前向きで積極的な園・学校の態度に、保護者は安心し、信頼を寄せることでしょう。

これが、子どもの「気がかりな行動」をめぐる「保護者との協力関係づくり」に入っていく際の、最初にして最大のポイントです。これを骨子に、以下のメッセージを送るようにしましょう。

【メッセージ 2】 「子どもに寄り添った視点」で伝える

子ども自身が困っていることを伝えましょう。「お子さん自身、 のとき、 × × すること（理解すること・気持ちをコントロールすること等）が苦手なようですね。本人なりに頑張っているのですが…」というサポーター的な視点から、子どもの困っている姿（不適応）を伝えます。

子どもの頑張りを期待する親

子どもの「不適切な行動」はすべて、本人なりに適応しようと努力しての「結果」なのですが、そのことは中々保護者に伝わりません。まずは、担任がその頑張りを理解して、保護者に伝えましょう。（特別支援教育実践マニュアル No.1～3 参照）

他者からの評価というものは、面と向かって伝えられるよりも、第三者（社会）を経由することで、良くも悪くも強められます。保護者は、「わが子の頑張る姿」を直接目で見る以上に、第三者である担任から伝えられることにより、「わが子の現実（頑張った上での不適応）」を受け入れる準備ができます。

【メッセージ 3】 「親の思いを受け止めた」ことを伝える

それまでの保護者なりの努力を否定しないようにしましょう。保護者の苦勞を認めることから始めます。「親御さんが頑張ってくられただけあって、お子さんは ができるくらいまでになっていますね。これから、こんな（具体的な）目標で、こんな（具体的な）やり方でいきましょう」と。

親も認められたい



たとえそれが、間違った点に力を入れた育児（例えば勉強一辺倒）であったとしても、保護者のその思いを受け止め、より効果的な力の入れ方（本人に合った勉強法）を一緒に考えていくことから始めましょう。

保護者は、担任と一緒にいろいろなと試みてくれた、という思いがあって初めて次のステップ（受診や進路変更など）に踏み出すことができるのです。

このとき保護者として担任に求めるのは、障がいに関する「知識」や「経験」ではなく、教育への「熱意」です。

【メッセージ 4】 「特別だけど格別ではない」ことを伝える

「うちの子だけ特別扱いしてもらうことは、他の子との関係でどうなのでしょう」と心配される保護者には、しっかり伝えましょう。「確かに、“特別扱いだ”と言って羨ましがるとはいます。でも大丈夫です。羨ましがるとは、その子なりの理由があったことなのです。担任として、そういう子にもしっかり関わりますので」と。

他の子の思い

一人の子への「ちょっとした工夫・手立て」を羨ましく思う子どもたちがいます。「クンだけズルイ」と直接表現してくれれば分かりやすいのですが、ふてくされたり悪態をついたりする子もいます。

そうした気持ちに対し、表面的に答えようとするならば、「クンはクンで頑張っているんだよ。だからクン（不平・疑問を呈してくる子）も応援してあげてよ」という答え方になるわけですが、それでは不十分です。

そうではなく、不平・疑問を呈する子本人に焦点を当てましょう。こんなふうになります。

「クンが頑張っていること、先生は知ってるよ。クンはいつも～しているもんねえ。あ、ちょっとそれ見せて、素敵じゃない、すごいねえ」と。その子自身のことを話題にしてあげましょう。みんな、自分のことを話題にしてもらうことで満足度が高くなります。たいていの不平や疑問は跡形もなく消えてしまいます。

高学年ともなると、自分の意見を一人前に扱って欲しいという気持ちが強くなります。不平を感じる意見を尊重し、傾聴しましょう。その上で協力を依頼します。

保護者は、わが子の「気がかりな行動（問題行動・発達の心配）」を意識するとき、トラブルメーカーとして、あるいは授業についていけない困った子として、わが子が集団からはじかれてしまうような心配を抱くものです。そんな思いの中、担任が示す他の子へのサポータティブな態度は、保護者をして、わが子がクラスの一員として受け入れられる姿を実感させやすくすることでしょう。



まなびサポート事業

教育研究センター 美浜北小学校内 381-7960・7961

まなびサポート相談室 見明川中学校内 390-5204